

シン・シティ

2005(平成17)年10月9日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・脚本＝ロバート・ロドリゲス&フランク・ミラー／特別監督＝クエンティン・タランティノー／原作＝フランク・ミラー／出演＝ブルース・ウィリス／マイケル・マドセン／ニック・スタール／パワーズ・ブース／ジェシカ・アルバ／ジョシュ・ハートネット／ミック・ローク／ジェイミー・キング／ルトガー・ハウアー／イライジャ・ウッド／フランク・ミラー／カーラ・グギノ／クライヴ・オーウェン／ベニチオ・デル・トロ／ブリタニー・マーフィ／ロザリオ・ドーンソン／デヴォン青木／マイケル・クラーク／ダンカン／アレクシス・ブレデル (ギャガ／コミュニケーションズ配給／2005年アメリカ映画／124分)

……フランク・ミラー原作のハードボイルドタッチの劇画が、白黒基調でスクリーン上にはじめて登場！ 「シン・シティ」を舞台に活躍する3人の中年男による3つの物語に共通するのは果たしてナニ……？ それを見極めるのが、この映画の楽しみの1つ……？ 多くの人間が登場し、複雑な事件展開を見せるにもかかわらず腹にグッと入ってくるのは、それぞれのキャラが徹底しているせい……？ 甘ったるい韓流ドラマ馴れしたおばさま族には不向きだろうが、軟弱な日本の若者たちにワイルド感を取り戻させるには、こんな映画が最適かも……？

原作者が共同監督に……

この映画の原作はアメリカンコミックの『シン・シティ』。その原作者が『バットマン』などの原作で有名なフランク・ミラーだが、何とロバート・ロドリゲス監督はこのフランク・ミラーを共同監督に起用した。また、このフランク・ミラーは、多くの若手監督がこの原作の映画化を熱望したにもかかわらず、これまで10年以上も「自分の世界観を変えられることは許せない」という理由からこれを断り続けてきたが、ロバート・ロドリゲス監督だからこそその映画化を承諾したとのこと。

そしてこれによって、ロバート・ロドリゲス監督は、全米監督協会から、映画

監督が生業ではないミラーを共同監督に起用したことを糾弾されて協会と対立し、結局協会から離脱することになったとのこと。したがってこの映画では、監督と原作者との「一体感」が大きなポイント……。

これぞスクリーンで観る劇画！

私は最近ほとんどマンガ（コミック）を読まないが、昔の小池一夫原作の『子連れ狼』やもっと古くは白土三平原作の『カムイ伝』などの歴史モノ劇画は大スキだし、横山光輝原作の『三国志』も大スキ。これに対して、いわゆるアメリカンコミックの代表作が『バットマン』だが、それに続く『スパイダーマン』『デアデビル』『エレクトラ』などは、どうも私の目には真剣味が足りず、マンガ的になってしまい（?）、あまり面白くないもの……。

そして『シン・シティ』もこれらのアメリカンコミックの原作者であるフランク・ミラーの原作だが、私の印象では、これは『バットマン』など一連の作品とは異質で、いわゆるハードボイルドもの……。

そして何より注目すべきは、コミック紙上で味わうのと同じようなそのハードボイルド劇画を、この映画はそのままスクリーン上に登場させていること。それは、ほとんどカラーを使わず、白黒をやたらに強調した画面づくりによるところが。そして、もう1つの特徴はこの映画に登場する3人の主人公によって、1人称での語りを多用していること。

ホントはそういう形で自分の心理状態を解説したり、ストーリー展開を紹介するのは、映画としては避けるべきなのだが、この映画に限ってはこれがピタリと決まっている。これこそ前述した監督と原作者の一体感がなせる業……？

全く別々の3つの物語と3人の主人公！

この映画はたくさんあるフランク・ミラー原作の『シン・シティ』のうちの3つをピックアップしたもの。その3つとは次のものだ。

①『シン・シティ：ハード・グッドバイ』。これは1991年に発表された記念すべき第1作。

②『ザ・ビッグ・ファット・キル』。これは1996年6月に発売された第3作。

③『ザット・イエロー・バスタード』。これは1997年に発売された第4作。

そして、主人公も、

①は、仮釈放されている立場にあるタフガイのマーヴ（ミッキー・ローク）。

②は、娼婦たちだけの自治区の女番長ゲイル（ロザリオ・ドーソン）のかつての恋人であったドワイト（クライヴ・オーウェン）。

③は、狭心症に苦しみ、引退を迎えようとしている刑事のハーティガン（ブルース・ウィリス）。

原作では、これら男たちの間には何の縁もゆかりもなく、それぞれ別個独立した物語が展開していくが、それは映画でも同じ。しかし、この映画ではこの3つの物語と3人の主人公をうまく融合させて……？

3人の主人公に共通するものは……？

3人の主人公に共通するのは、第1に原作や映画のタイトルどおり、3人とも犯罪と欲望が渦巻く街「シン・シティ」に根付いている男だということ。

第2は、3人とも今時の韓流スターのようなカッコ良さとは無縁の中年男だが、みんなタフで、悪と闘うことについての根性がすわっていること。そしてその反面、女にはやさしいということ。

そして第3は、3人の主人公が通う(?)のがストリップ・バーの「ケイディ」だということ。

といっても、マーヴはこの店のなじみ客だし、ドワイトはこの店のウェイトレスのシェリー（ブリタニー・マーフィ）と目下恋仲にあるが、ハーティガンは本来この店とは何の縁もゆかりもなかったもの。

ハーティガンがこの店にたどり着いたのは、後述のとおりだが、8年間の監獄生活を終えて、ナンシー（ジェシカ・アルバ）を探したところ、人気のないナンシーの部屋にあったマッチから……。そして、それを頼りにストリップ・バー「ケイディ」を訪れ、「ナンシーはいるか？」と店員に聞いたことから、ナンシーの身にも危険が……。はじめてハーティガンが「ケイディ」を訪れた時、スクリーン上には、たまたまこの店に遊びに来ていたと思われるマーヴやドワイトが登場するから面白い……？

ジェシカ・アルバのベスト作品

ストリップ・バー「ケイディ」につとめる19歳のストリッパー、ナンシーを演ずるのは、今年3本の映画に立て続けに出演しているジェシカ・アルバ。第1は『ファンタスティック・フォー』（05年）、第2は『イントゥ・ザ・ブルー』（05年）そして第3がこの『シン・シティ』だが、この『シン・シティ』での彼女が1番キレイ……。『ファンタスティック・フォー』は宇宙服に身を包んでいたため、彼女の魅力が半減していたし、『イントゥ・ザ・ブルー』ではちっちゃな水着をつけて水中をダイビングする彼女の美しい肢体を見せてくれたが、ストーリー性がもうひとつ……。それに比べると、この『シン・シティ』での彼女は登場時間は短いものの、11歳の時に誘拐されて殺されかけたところを助けられ、今は立派なストリッパーに成長した（？）ナンシーの人間像を見事に演じているうえ、その美貌が実によく冴えている。なお、私の鑑賞眼の名誉のために言っておけば、それは決してストリッパー役の彼女が、見事に腰をくねらせているからではない！

3つの物語 その1

この映画は、3人の主人公による別々の物語だから登場人物がやたら多い。しかし、それぞれアクの強いキャラが多いから、わりとわかりやすい……。原作は第4作目ながら映画では最初に登場するのが、刑事のハーティガン。相棒のボブ（マイケル・マドセン）とともに、11歳の少女ナンシーの誘拐犯のロアーク・ジュニア（ニック・スタール）を追いつめるシーンから映画は始まる。狭心症の持病を持つハーティガン刑事は、今日が引退の日。何とか凶悪な誘拐犯を追いつめ、現場に踏み込んでいこうとしたが、相棒はムリをするなど忠告……。しかし、これを振り切ってハーティガンは単独で踏み込み、ロアーク・ジュニアの左耳、右腕、そして大切な男性自身を撃ち抜いたが、自分自身もボブの裏切りによって、背中から銃弾を。

さて、その結末は……。？ と思っていると、ひとまずここで話は中断し、次は主人公マーヴのお話へ。

3つの物語 その2

第2話の主人公は、傷だらけの顔を持つ巨大な男マーヴ。こんな男には、商売女でも気味悪がって寄りつかないのに、なぜか金髪美女のゴールドディ（ジェイミー・キング）が近寄り、天使のようなサービスを……。ところが、目を覚ましたマーヴの隣には死体となったゴールドディの姿が……。これはプロの仕業と見抜いたマーヴは、直ちに馴染みのストリップ・バー「ケイディ」に赴いて、犯人捜しに着手。そしてそれを支えるのが、マーヴの保護観察官をしている美人のルシール（カーラ・グギノ）。なぜか彼女の家にはマーヴの出入りは自由。そのうえ、非合法ながら、マーヴに必要な薬をヤミルートで入手して手渡してやったり、ちょっとした安らぎの場を提供したりと、公私にわたって彼女はマーヴの良き理解者。

それはともかく、さまざまな危険を冒しながら、マーヴが辿り着いたのは1人の極道神父（フランク・ミラー）だったが、この神父のボスはロアーク枢機卿（ルトガー・ハウアー）であり、その配下にある凶悪な人殺し担当（？）の実行犯は、人食いの異常者ケビン（イライジャ・ウッド）だった。メガネをキラリと光らせた小男のケビンは、意外な強敵で、一度はマーヴもやられてしまったほど……。そして人のいいルシールも遂に犠牲者に……。

他方、ゴールドディの双子の姉にあたるウエンディ（ジェイミー・キング）たちの売春婦グループは、当初はマーヴが敵だと思っていたが、意外にもマーヴがゴールドディを本心から愛していたことを知り、ウエンディたちは急遽マーヴに協力することに……。これ以上は考えられないほどの残忍な手口でやっとならケビンをやっつけたマーヴだったが、敵の本丸であるロアーク枢機卿の元へ向かったマーヴの行く末は……？

3つの物語 その3

話はさらに突然変わり、「ケイディ」でウェイトレスとして働いている女性シェリー（ブリタニー・マーフィ）の部屋の前で、ドアを開けると叫んでいるのは、ジャッキー・ボーイ（ベニチオ・デル・トロ）とその4人の仲間たち。シェリーの部屋の中には、昔のある事件のために今は整形して別人になりすましシン・シ

ティに潜伏している、シェリーの現在の恋人ドワイトがいた。部屋の中に乗り込んだジャッキー・ボーイは、男の臭いを嗅ぎ取り、シェリーを問い詰めた。しかし逆にドワイトに痛めつけられたジャッキー・ボーイたちは、部屋から脱出。さらにドワイトから追跡されたジャッキー・ボーイたちは、今は、警官に金と楽しみを与える代わりに娼婦たちの自治区として娼婦たちが支配権を得ているオールド・タウンへと逃げ込んだ。今、このオールド・タウンを支配しているのは、かつてのドワイトの恋人だった女番長のゲイル（ロザリオ・ドーソン）。このオールド・タウンでは、ドワイトといえども勝手な手出しはできないものの、ベッキー（アレクシス・ブレデル）に声をかけて街の秩序を乱したジャッキー・ボーイたちをゲイルたちが許さないのは当然……。その実行部隊は、日本刀や卍型手裏剣そして弓矢を自在に操るミホ（デヴォン青木）だが、彼女はあのタランティーノ監督の『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』（03年）で日本人娘ゴーゴータ張を演じた栗山千明のような、まさに武器を操る殺人マシーン……。まずは銃を振り回すジャッキー・ボーイの右手首をチョン切ったかと思うと、わめきちらすジャッキー・ボーイを筆頭に次々と4人の仲間を血まつりに……。ところが、ヤバイことにこのジャッキー・ボーイのポケットから出てきたのは、何と警察官の身分証明書！ こりゃえらいこっちゃ……。

警官殺しは協定違反！

このオールド・タウンのまちは前述の協定の下に成り立っていたから、警官を街の中で殺したことが判明すれば協定違反となり、ゲイルたちのオールド・タウンの支配権が奪われることは必至……。そこで、ドワイトが提案したのは、5人の死体を誰にも知られないように始末すること。そこにドワイトには1つの目的があった。

苦勞して車のトランクに5人の死体を乗せようとしたが、切り刻んでも入りきらないため、やむをえずジャッキー・ボーイはそのままの姿で助手席に。助手席に座る死体と一緒にドライブとはちょっとオツなもの（？）だが、その途中、この死体がドワイトに対して声を掛けてきたから、ドワイトもビックリ……。そんなこんな物語を展開させつつ、遂にここでもドワイトと女たちは警官たちと最

後の決戦へ。それはオールド・タウンの利権を狙うマフィアであるヴァレンキスト一家の悪名高き用心棒マヌート（マイケル・クラーク・ダンカン）たちとの全面対決。手榴弾があちこちで爆発し、マシンガンの銃弾が飛び交うその最後の決戦の結末は……？

物語その1の後半は？

物語その3がすさまじい結末で終わると、スクリーンは再びハーティガン刑事の物語へ……。 「ケイディ」へナンシーを探しに来たハーティガンが店員にナンシーのことを尋ねると、すぐに、今ストリップダンサーとして踊っているのがナンシーだと教えてもらえた様子。しかし、ハーティガンにすれば、ナンシーの踊る姿を見ればまさに浦島太郎の心境だったはず……。そりゃそうだろう。11歳の時に別れた、あのか細くて弱々しい女の子が、今やこれだけ成熟し、男たちの目を楽しませるオンナに成長していたのだから……。

しかし、8年間も続いていたナンシーからの手紙が突然途絶え、最後には女性の指が入った封筒が送られてきたため、これは何としてもナンシーを探すべく、シャバに出なければと考え、ウソの自白をしてまで、扉の外に出てきたハーティガンだったが、その後にとったハーティガンの行動は、刑事にあるまじき軽率なもの……？ なぜなら、つけられているかもしれないという危険は、刑事としていつも考えておかなければならない原則のはず……。

しかし、既にケイディの店に入り込み、ナンシーの名を口に出した以上は、それに気づいてももう遅い……。そしてその時には、無心に踊っていたナンシーも、あの懐かしいハーティガンの顔を客の中から見つけ出し、仕事を放り出して、ハーティガンの胸の中に飛び込んでくることに……。こうして、ナンシーはハーティガンの軽率な行動によって、捕らわれの身となったが、ナンシーを捕らえたのは、何とあの死んだはずのロアーク・ジュニア。もっとも、ロアーク枢機卿の弟であり、ロアーク・ジュニアの父親であるロアーク上院議員が、金を湯水のように使って世界の名医を動員したおかげで、ロアーク・ジュニアは男性自身の生殖機能を取り戻していたが、薬づけとなったせい、今彼はイエロー・バスタード（腐ったミカン）となり、ひどい悪臭を放つ体質に……。

原作では、このイエロー・バスタードのキャラクターはもっと詳しく紹介され、幼女のみを次々と犯していくその行動も詳しく語られているようだから、そういう物語が好きな方は是非原作コミックを……。

敵のワナに落ちたハーティガンだったが、イエロー・バスタードによる縛り首の私刑に対しても、驚異的な首の強さと意思力の強さでこれを逃れ、今まさにイエロー・バスタードの餌食になろうとしているナンシーの救出に……。もっとも、女の叫び声やうめき声を聞かなければ興奮しないイエロー・バスタードは、何度もムチをナンシーに叩きつけて、ナンシーから叫び声をあげさせようとしたが、ハーティガンの言いつけを固く守ったナンシーはついに叫び声をあげることはなかった。そして、ハーティガンとイエロー・バスタードとの最後の決着は……。しかし、本来はそれですべて完了ではないはず。本来の悪の根源はどこに……？

悪の根源は日米共通……？

日本では田中角栄総理によるロッキード事件が、そしてアメリカではニクソン大統領によるウォーターゲート事件が、日米を代表する2大疑獄事件だ。そして、日本で今注目を集めているのが、日歯連による橋本派への1億円のヤミ献金事件。もちろん、これらの事件の真相は容易に判明しないが、世の中の悪の根源には悪徳政治家が存在しているものと相場は決まっている……？

もっともそんな決めつけをしたのでは、政治に対する若者の興味・関心を失わせ、ますます本来あるべき民主主義政治が形骸化する悪循環に陥るだけだが、現実を見るとそういう悪徳政治家がうじゃうじゃと存在していることは否定のしようがない事実。そして、フランク・ミラー原作の『シン・シティ』でも、その悪の根源はロアーク枢機卿であり、その弟のロアーク上院議員だ。やっとの思いで「シン・シティ」の中で、それぞれの悪を退治したハーティガン、マーヴ、ドワイトの3人の中年男だが、果たして3人は本来の悪の根源までたどり着くことができるのだろうか……？

この映画の結末をじっくりと味わいながらそんな深い洞察を加えることができたなら、あなたの映画鑑賞眼も一人前……？

2005(平成17)年10月12日記